

婦人と子ども

第八卷
第六號

フベール會發元

第八卷第六號目次

● 子供と音楽	
● 兒童の個性及び其取扱法に就て	松本孝次郎
● 實用兒童學講義	中村五六
● 家庭に於ける趣味の涵養	川口孫次郎
● 育兒の經驗	光藤泰次郎
● 玩具に就いて	和田實
● 統計學上の結婚	鹽野生
● 此ごろの料理	石井泰次郎
● 松魚釣り	かはぐち
● 雜錄數件
● 粉屋の鼠	ふきな
● 何でも博士	ふうな

投稿募集

一種類 ● か 伽 話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
 ● 一般記事 選擇の上本誌に載録せるものは
 内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取
 らずして其指定する人に本會より直接送ることを得
 一 注意 お伽話及一般は記事一行廿二字詰にて半紙又は郵紙に書
 かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
 月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて
 行く積りです。
 宛名は本會へ直接御送り下さい。
 開き封で應募原稿と標記すれば三十夕迄は郵税二錢で参ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する
 事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
 に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年
 分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致
 します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會
 か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

會 告

來る十三日(土曜日)午後一時三十
分日本橋坂本小學校附屬幼稚園
に於て本會第四九回常集會開會
致し候に付御繰合せ御出席下さ
れ度候也

六 月

フ レ ー ー ベ ル 會

夏期講習會開催廣告

本會ハ左記ノ各項ニヨリ夏期講習會ヲ開設ス世ノ幼兒教育ニ熱心ナル方々奮ツ
テ御入會アラシムトヲ希望ス

一 學科及講師 (順序不同)

● 保育思想の過去及將來

東京女子高等師範學校教授

中村五六

● 兒童の感情及意志

東京女子高等師範學校教授

黒田定治

● 科學的教育學としての幼兒教育

東京女子高等師範學校助教授

和田實

● 運動及唱歌遊戲の實際に就て

東京女子高等師範學校保姆兼教諭

雨森釧

● 談話の實際に就て

東京女子高等師範學校保姆

川口得

● 保育上に於ける自然物の應用に就て

東京女子高等師範學校保姆

池田トヨ

● 音楽

東京女子高等師範學校囑托

中村コウ

一時 間

明治四十一年七月廿一日ヨリ八月三日迄
(休ミナシ十四日間一日四時間)

○前號豫告ノ際ニハ日曜ヲ休ミテ三週間ノ積リナリシガ講師ノ都合
ニテ一日ノ時間ヲ増加シテ之ヲ二週間ニ短縮セリ

一 講習料 金貳圓也

但シ會員ハ二割引

一 會 場

東京女子高等師範學校附屬幼稚園

一 申 込

講習料ヲ添ヘテ直接本會ヘ申込マル可シ

一 證 明 書

志望ノ向ニハ出席ノ度数ヲ案ジテ授與ス

一 寄 宿 所

本講習ノ爲メ地方ヨリ特ニ上京セラル、方ニテ宿泊所ニ御困
リノ方ニハ本會ハ可成的便宜ヲ計リテ責任アル宿舍ヲ紹介致
ス可ク候尤モ此場合ニハ成ル可ク前以テ御照會アリタシ

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

フ レ ー ベ ル 會

明治四十一年六月

(注意！講習會ニ關スル記事參照セラルベシ)

日本造花研究会著

新式造花獨けいこ

挿畫三百餘頗美本机上の飾となる

定價 金五拾五錢

郵替貯金 金六錢
口座番號 六六五
最新刊 三版二ヶ月にて賣盡し 四版

特女中が校閱無學の女中に本書を讀んで聞かせた丈けでも實に立派に造り得材料は少し材料は求め易く造り易い新工夫がしてありますから費用極少し
色標本か分與各材料の實物標本とを上げます道具は不用最初は道具一組三十五錢で揃ふ
三百餘の畫を以て平易に親切に説明し尙實物標本とへ分與す如何なる初心者でもはつきり分り容易に熟達す

大好評を得、訂正増補第四版發賣

大景品づま

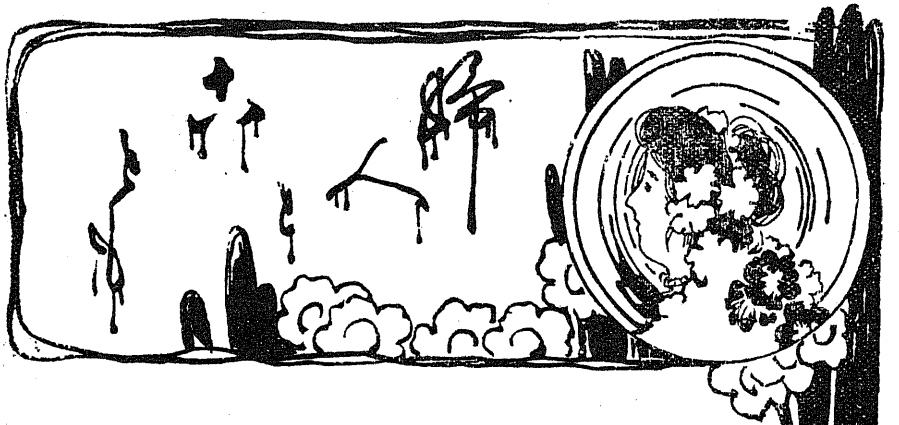
▲一等は金拾圓の材料と道具
▲金高 壹千二百〇四圓

空籤一本もなし

▲景品券は各書籍中にあり
▲景品は直に郵送す

東京市牛込區
納戸町六番地

明治の家庭社



第八卷第六號

子供と音楽

近頃或る學者が、子供の音楽に對する關係及び其の男女の差別について研究したる所によれば、音を學び得る力は三歳にして最も弱く、六歳に至つて充分に強くなる由なり、總計百六十一人についての研究の結果を見れば、未だ三歳の頃は男子は二十九パーセント、女子は四十九パーセントのみなるが、六歳に至れば、男子は四十パーセント女子の七十パーセントは種々の音階を歌ひ得ることが出来る、又概して云へば男兒より女兒の方が此の點について大に勝れる所がある。

又子供が音楽に對する嗜好に就て觀察せしに少しく意外なることあり、三歳の男女に就いて見れば、男の方は三十三パーセント女の方は五十三パーセントなり、四歳になれば男兒は三十一パーセント、女子は六十パーセントになり、又五歳に至れば男兒は二十三パーセント女兒は六十五パーセントになり、更に又六歳になれば、男子は二十パーセントに降り、女兒は又五十七パーセントに降る、是に依て見れば男子は三歳より六歳に達するに次第に音楽に對する嗜好の度を弱くし、女兒にありては少しく之れと異なる所ありと云ふ。然れども未だこの研究は日本の兒童の上にも同一なるものと信ずること能はず

兒童の個性及其取扱法 に就て

文學士 松本孝次郎

前回に發動的の子供と云ふものは注意の流動といふものがあつて永く一物を静觀することが出来ないといふことを述べて置きましたがつまり此類の子供と云ふものは考へる所の思想と云ふものを直に發表して之を實行して仕舞ふ。

その激しいものになりますると自分が歩く時にでもドン／＼歩くことは出来ないで矢張り歩く中に注意の流動があつて他の小供の様に歩くことに熱心になることは出来ぬので矢張り途中で色々な遊事をやるといふやうな性質になつて行くのです、此發動的の兒童は概して獨斷的に何でもやるといふ性質があります、ナカ／＼他の人の言ふ事を聴かない、それで自分からして爲さうと思つたことを其通りに直此獨斷的に自分の思ふ事を何でも其通りにやりたがるといふのはどう云ふ譯で起つて來るかといふと、此類の小供は常に自分といふ者

の思ふた事を發表したいといふ傾きがある爲である、常に已といふ者を大勢に發表したいといふ傾きがあるから起つて來る、詰り始めにどう云ふ様に啼くかといふ事を申したが丁度啼といふ事も自分の心を發表するといふ傾きから出て來る、我儘であるといふ事も少しも違はぬ、我儘であつて獨斷的であつて其中矢張り已の心を其通りに發表したいといふ傾きが表はれたものに外ならぬ、此類の小供は時々粗暴亂暴な事をば随分やります即ち色々の感覺機關の中で以て此類の小供には筋肉の感覺といふものが心の内容を重みに形造つて居る、筋肉に訴へたことが餘程よく精神上の内容を形造つて居ると言つて宜いのです、それから此類の小供は他の小供を成るべく自分の思ふ様に支配してさうして自分の權力を揮つて來る事を好んで居る、小供の中に於て所謂小供の大將になりたがる又實際なつて居る小供は此發動的の兒童にあるのです、それだからして皆な人が能く注意して御覽になるといふと小供の中で他の小供をば支配して親方となつて居るやうな小供は皆世性質を持

つて居るのです、さうして精神の方も特に高等なる精神の働きに付て申しますと此類の小供は餘り速かに概括する傾きがあつていけない、概括の仕方か餘り早過ぎていけない、詰り充分精密で無い、例へば一度此類の小供が東郷大将の話でも聞かされるとモウ直ぐに自分は海軍の軍人になりたといふやうな心を持つて仕舞ふ、其小供に話をかして居る保母から言へば大層其小供は自分の話に感動したやうに見へまするけれど、是決して喜ぶべきもので無い、唯、一場の話で聞いた丈で直ぐに自分は海軍々人になりたいといふやうな決心をするといふのは概括の仕方が餘り速かであり過ぎるものと言はなければならぬ、其類の小供は即ち發動的の小供が多いのですそれから又此類に屬しまする小供は物を區別することをば認めてさうして之を記憶して居るところの力に乏しい、それはどう云ふ所に表はれるかと言ひますと或小供は度々同一の過ちをやる事がある、自分の心から悪い事をするといふ譯ぢや無いが過つてやる事が度々ある、同じ過ちを屢々やつていけない、どうも

同じ事を幾ら言つて、犯していけないといふのは其小供のどう云ふ性質から起つて居るかといふと區別といふことは認めて之を記憶して居る力が乏しい爲であります、それは詰り心が何時でも唯、發動的にばかり働いて之を自分で其事に當つて省るといふ性質が缺けて居る爲であります、さうして又此類の小供は注意の流動といふ事がありまする爲に今教へられた事も右の耳からして左の耳へと抜けて仕舞ふやうな工合に精神の中で之を類化する暇が無い、チアンと自分に持つて居る思想と今言はれた事とを類化して心の中に止めて置く丈の性質が欠けて居るのです、斯う云ふ様に發動的兒童の性質の欠點といふものが色々の所に表はれて來まするから幼稚園或は家庭に於きまして其小供が此様な傾きを持つた小供であり落附かない小供であるといふ事を認めなければ非此小供の性質を落附ける様に工風して行かなければならぬので成る可く斯う云ふやうな性質は家庭の時代幼稚園の時代は勿論であるが十五歳位までの中に此性質を直すといふ事を心掛けぬといふとそ

以後に於て之を改めるといふ事は六つかしい、何故六つかしいかと言ひまするとモウ青年の頃になりますると之を改めるといふよりは今までの性質をば其通りに守るといふ方の傾きがありますからしてどうもいかぬのです、

それで斯う云ふ様な片寄つた個性といふものを打遣つて置けばどう云ふ様な憂うべき事が起つて來るかといふと詰り何事も充分本當に理解するところが出來ないで終つて仕舞ふ、詰り唯、物の表面丈けを理解して本當に深く理解しないで終つて困るのです、そればかりで無く自分では本當に分らなかつたものを恰も分つたやうな風に假定して居つていけないのです、それでありますからよく大きな子供に數學などを教へて見まするとこちらでは根好く説明してやる、小供の方でも何だか分つたやうな風に見へて居つても問題を出してやらせて見ると決して分つて居らない、能く分つて居らないといふ事が分る、斯う云ふ場合に此小供は發動的兒童の發達したものであります、矢張り自分では本當に分らぬけれ共分つたもの、様に

自分で假定して濟まして居るから教へる方の人もツイ分つたか知らぬと思つて居るので其實はチヨツとも理解して居らないといふ事があるのです、それだからして矢張り學力が本當に進むといふ事は無いさうして其上にどう云ふやうな職業でもどう云ふ様な學問でも總て専門的事をやるのには適しませぬ、斯う云ふ様な性質の儘で育つて仕舞へば何事も深くはやらぬですから専門的事をやるに適當しなくなる、

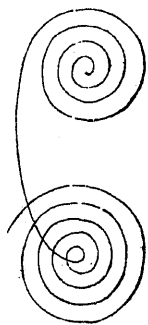
そこで此發動的の兒童を取扱ふにはどう云ふ方法を用ゐたら宜いか發動的の兒童に對しては多少困難な仕事をやらせる方が宜いのです、例へば積木の如きものに致しましても自己の工風といふやうな事を多く本當にやらせる方が宜い、若しこちらからして手本を示してさうして此通りやれと言へば發動的の兒童は容易くやつて仕舞つてわとは自分の勝手な事をして騒ぐとか巫山戯るとか遊ぶとか云事になつて仕舞ふ、所が工風といふ方をやらせますと其間に自分の注意といふものを他へ移すことは出來ないからして、それで始りは此注意の流動

性を持つて居つて他の事へ移り易いのですけれども、
實際工風して考へて居る間には注意が他へ轉ずる
ことは出来ないからして度々さう云ふ事を課せら
れて工風して居る間に其小供の注意の流動性とい
ふものが減つて来る、一つ事に割合に長く掛つて
注意して居ると其性質が養はれる事になつて来る
のです、だからして他の小供よりは割合に多く考
へる方の事を餘計に課した方が此發動的兒童の個
性を直すことが出来るのです、之を圖に描いて見
ますと發動的兒童の注意の働方は



といふ風で、天然自然の儘であるならば一つ所に
長く止つて居ることはい出来ないから、始終違つた
方向に向つて此通りに進んで行かうと言ふので
す絶へず異つたる方向に進んで行かうといふので
す、これ之を直し、一つの事を考へるやうな工風
に訴へる、さう云ふ作業をやらせて居りますると
此類の小供の注意の働方が或一つの所で割合に長

く働いて居つてそれから又他の事柄に移つて、さ
うして其他の事柄に付て割合に長く働いて居つて
又他の方へ變つて行かうといふ譯になる、詰り或
一つの事柄に對して働いて居る時間が割合に長く
なるやうな工合に行かうと言ふのです、即ち注意
の働方が單純的であつたものがこちらで以て自分
の考を長く廻らさぬければならぬやうなさう云ふ
作業を與へますと是が此小供の個性を表はす一つの方
て行くのです是が此小供の個性を表はす一つの方



法でありませう、
それから此發動的の兒童は前に申します通りに他
の小供を支配しやうといふことを好んで居る、其
天性の儘に打遣つて置けば益々他の小供を支配し
自分が先になつて注意を輕々しく働かすことを
好む様になりませうから之を導く爲めに幾らか此小

供よりは進歩した小供の中に入れることが必要である、即ち此小供に依つては左右することの出来ない様な、幾らか此小供よりは發達した様な小供の中に入れることが必要であります、詰り餘程良い方の小供、優等の小供の側へ持つて行つて置くことが此小供の個性をば幾らか抑へるゝが出来るやうになる方法であります、故に此小供の友人を擇ばなければならぬ、其擇方は成るべく此小供よりはモツと幾らか頭の進歩したやうな小供と友達にして置くことが非常に役に立つのです、保姆が若し此類の小供に或仕事を課しましてさうして幾らか手傳つてやらなければ旨いかなぬ、若し小供に困難で有過ぎる様に認めた場合に之を助けるにはどう云ふ方法にして助けたら宜いかと言ふと一度に充分に助けてはいけない、詰り此類の小供には度々に助ける様にすることが必要である、一から十まで助けてはいかぬ、一から三まで助け三から六まで助けて行くといふやうな場合に二時に助けないで少し宛助ける即ち工風の如きも小供の考には出來ると認めたらば其端緒を始りに助け

て置く斯うしなさいと言つて置く、その先きはこちらで直ぐにやつてやらぬ、又考へさせそれから又其先を助けるといふやうな場合に段々に助けることが非常に必要であります、それでないと云ふと矢張り此子供に注意の流動といふことを止める方法にはならぬのです。

世界各國最近著社せし各國新聞の重なる記事

▲小學生の夏期農業 昨年組育の小學校にて夏期休業を利用して上級の生徒をして農事の手助けをなさしめたるに農業者に非常なる満足を與へたるのみならず生徒は海濱等に旅行するよりも著しく健康上の發達を見たるより今年も同一計畫を爲す筈にて此程生徒中より志望者を募集したるに四月末に於て既に二千五百名に達したる由なり

▲最大の時計 米國シアトシ市の會堂の時計臺に据付るため目下コンネクチカットの時計製造會社にて製造中なる時計は世界最大の時計たるベシトの事に於て其時計の長針のみを運搬するに貨車一輛を要すべく其重さ一噸の三分の一にして長さ十八呎四分の一なり又其針が一分毎に動く距離は廿三時一日に半哩以上を動く割合なり時計面の直徑は廿八呎にして時計の器械の重さは六噸なりと

實用兒童學講義

東京女子高等
師範學校教授

中村 五六

二遺傳と適應

予は本誌第七卷第十二號に於て兒童の本質に就いての概説を試みて置いた。讀者は本篇を讀む前に一應前者を繰返して閲讀せられた後更に本篇を讀まれんことを希望する。

既に彼時も説明したる如く兒童は元來發達す可き素質を生れながらにして持つて居るものである。此生れながらにして具有せる發達の素質は生物學上名けて遺傳と云ふものである。即ち人類は發達す可き萌芽として諸種のものゝ遺傳せられて居るの之を夫れゝ發達せしめた處に人間の間たる理想は存するものと認めなければならぬ。今之に關する實際の事實を調べて見るに
佛蘭西のルイ十四世は非常な大食の人であつたが其兄弟及王の諸子は皆大食家で此傾向は永く子孫に遺傳したさうである。又チャレス十世の父は奇異偏癖な人であつたが此傾向はチャレス十世

に及びて一層強く幼兒より非常な猛烈な本性を表はし種々の學校に入學したけれど何處の學校でも放校の處分に遇つて遂に兵籍に入つた處が飲酒の爲めに軍服を賣つた爲め死刑の宣告を受け僅かに醫士の方で其飢に堪えきれなかつたのだと云ふ證明を得て漸く免れたと云ふ話である。此外彼の飲酒が子孫に及ぼす害毒の如きは實に烈しいもので種々の實例が上げられて居る。又佛國のリエーポ一と云ふ學者の調べに因ると世界に於ける著名の科學者文學者哲學者と云ふものは皆其系圖中に著名の學者を有するものであると云ふて居る。又瑞西から出たジアツグス、ペルノイリと云ふ人は始めて學者として家名を上げた人であつたが其子孫には多數の學者が輩出して現に數人の學者が其子孫中にあると云ふことである。以上は著名の事實を上げたのであるが斯様な著名な人に就いて云はずとも平常吾等の見聞する所で見ても遺傳の事實のあることは明かな事である。親の顔形が子孫に傳はることや其氣質が似寄つて居ることは殆んど當然の様である。尤も時には親子著しく異なつて

居ることがないでもないが是等は寧ろ變則で普通の場合には子々孫々同様な氣質や形貌を遺傳して行くもので爪の蔓に茄子がならぬとか鳥の子は黒いとか云ふのが此邊の眞理を云ひ表はしたものである。尤も此遺傳と云ふものには親から子へと直接に遺傳することもあるし或は祖父若しくは夫以上の前代の遺傳が忽然として子や孫に表はれることもあつて其等の系路を調べることは中々容易でない。従つて何故に遺傳と云ふ様なことがあるか。其法則は何んなものであるかと云ふ様なことは今日に於ても明かでないのである。併も其原因や法則は明かでないとしても遺傳と云ふ事實のあるとは確かなことであるから子供を取扱ふ人は大に此點に注意して各兒の遺傳の特性を知ることと努めて之に因つて教育の方針を求めると云ふことは大切なことである。

斯くの如く人は遺傳と云ふものに因つて其發達を根本的に限定せられて居るものであるから此意味で云ふと子供と云ふものは後來如何なるものに發達し如何なる技能に秀づるかと云ふことは既に生

初の際に一定されたものと認めて差支ない様に思へる。イヤ或一部の人々には實際斯様に考へられて居る様である。そして甚だしいのは小供は三年立てば三つになる。放任して置いても相當には發達する。何も教育々と骨折し騷いだ處で生來の馬鹿を伶俐にする譯には行くまいと頗る樂天的に考へて居る人が尠くない。是は大なる誤りである。元來發達と云ふことは兒童本來の性質ではあるが然りとて其發達は材料を要し機會を要するもので決して空に譯もなく發達し來るものではない。身體の發達に食物を要し其成熟には一定の時期を要する如くに心性の發達に於ても一定の材料と一定の時期とを要するものである。小供は教へ可き物を教へ鍛へ可き時に鍛へなければ決して完全な發達はしないものである。子供は發達す可き萌芽を以て持つて居るとは云へ其萌芽は植物の夫の様に形の上に完全に出來上つて居るものを遺傳して居るのではなく唯適當な材料と適當な時期とに應じて發達す可き傾向即ち素質が遺傳せられて居るのである。故に其遺傳せられた素質を發達せしむ

るか否かと云ふ問題は生後の境遇如何に因つて決せらる可きもので之が生れた當時から未來迄ちやんと確定して居るものではないのである。従つて子供の將來を憶測して妄りに其發達を云々するのは早計であると云はねばならぬ。中にはどんな素質がかくれて居て何時何な機會に因つて表れて來ないとも限らぬ。又是と同理で子供は假令或面白からぬ傾向の遺傳を以て居つたとしても教育者の注意に因つて被教育者をして其傾向の發展を促す様な材料と機會とから遠けることに成功するならば必ず之を壓迫することが出来るに相違ない。勿論多くは斯る場合に於て其惡傾向の發達を促す機會に絶体に遠からしむることは不可能に違ひないが少くも其機會を少くし其發達を制限することが出来るのである。遺傳は元來教育の効力を制限するものであるが此點に於ては確かに教育の力に因つて遺傳を支配することが出来ると云はねばならぬ教育の可能である理由も此邊に存するもので教育者は遺傳の恐る可く重んず可きことを認めると共に之に對して徒に落擔せず失望せず自己の教育力

の決して輕視す可からざることを思はなければならぬ。併し或人は云ふかも知れん。「成程教育は必要であらう。そして遺傳を制限する力もあるであらう。併し何れにしても遺傳の範圍内での仕事で此範圍を超過して偉なる發達を遂げる譯には行かぬ様だ。即ち今茲に百の價値ある發達を來す可き遺傳があるとして教育の力に因つて之を百以上の價値あるものに發達せしむることは不可能にあらざるか」と

是は一應尤なる質問であるが幸にも生物には外圍の狀況に適應して必要なる變化を生ずる一種の性質がある。是は進化論上生物の適應性と名くる所のもので此説に因ると、人間は遺傳に因つて大體に於ける固定を受けて居る様なものの一方には其境遇に應じて適當な變化を生ずるが故に其境遇次第に因り遺傳を超過して偉なる發達と爲すものが随分あるのである。勿論其超越的發達は基礎たる遺傳に對して突飛な隔りを持つ可きものでないのが當然である。性來の馬鹿は如何に教育しても大學者になる譯には行かぬに違ない。併し底能兒

として教育の効力がある以上は同様に普通の脳力あるものは教育の力に因つて尙之を向上せしむるものとが出来たことは見易き道理ではあるまいか。之を人間以外の生物界に尋ねて見るに吾々が毎日の食膳に上される彼比良目と云ふ魚は幼時には体の兩側面に各一個宛の目を持つて居るのに漸次生長するに連れて暗臍色の一方に寄り來つて終には白色なる一面には全く目のない様になるそうだ。又北海道や東北地方に澤山産する「はや」と云ふ動物

は一見泥土の固まりと外見えないものであるが之が岩石に固着しない前は目もあり口もある。蛸斗で盛んに泳ぎ廻はつたものだそうだ。前者は必要なる爲めに機能は之に應じて移動し後者は不必要なる爲めに機能の退化を示したものと云はねばならぬ。此他盲人の觸角が異状な發達をしたり、米國のサンダーと云ふ人は鐵啞鈴で練習して大力士になつたりしたのを見ると、何うしても動物外に人間には能く外界の事情に適應して異状な發達をする所の性能があると見なければならぬ。既に斯る性能があれば教育は此性能を利用して以て其人を教

育し時には其遺傳の幾分を超越して發達せしむることは決して不可能の事ではあるまいと思ふ。要するに子供と云ふものは遺傳と云ふ先天的の素質を培養し之を完全に發達せしむることが出来ると共に必要に應じて之に多少の變形を來たさしむることが出来るものである。

▲曆の改良新案 現今世界に於て最も廣く行はるゝ太陽曆の改良に就き従來種々の方法を案出したるものあれども今日まで一も行はれたるものなきが今、英國のワイリツプ、ワイルツト氏が案出したる方法は頗る便利なるもの、如く思はる即ち其方法は毎年元日を週日中より除き單に之を何年の元日と稱するなり又閏年の一日は之を閏日と稱して元日の次に加ふるなり此の如くなるときは毎年三月六十四日にして一月の一日は日曜に始まりて年末は土曜日と終るとなるなり尙又月に因りて日數を異にするは煩はしきとなれば一月及び二月は三十日、三月は三十一日、四月は三十日、五月及び六月は卅一日、七月及び八月は三十日、九月は卅一日、十月及び十一月は三十日、十二月は卅一日と定むるに在り此方法は宗教上殊に便利なる由なれども容易に行はるべしとは信じ難し

家庭に於ける趣味の涵養

川口孫治郎

第一節 家庭の人々

其一、家長と主婦

如何なる場合に際しても、我家族の社會に於ける幸福と繁榮との如何は盡く己一身の責任なりとして泰然と引受け居る家長の恩威の自づから現るゝやうにゐること、特に如何なる場合に際しても、我家族の家庭に於ける平和と幸福との如何は寄せて全く己一身の責任たりと優然と引受け居る主婦の慈愛の自づから溢るゝやうにあること、約言すれば、權威備れる犠牲的精神と慈悲深き犠牲的精神との二者が、殆んど宗教的に具足すること、之が家庭に於ける趣味涵養の自づからに行はるべき根本的要件である。

歩を進めていへば、若し主婦にして具足せざるどころありとも、家長に於て之を導いて以て右の要件に合するやう、わざとならず心懸くること、及び之と反對に若し家長に不十分なるところあり

とも、主婦に於て之を助けて以て右の要件に合するやう、かたくなならず心懸くること、が根本要件中の更に要部である。就中、後者即ち主婦の徹底せる犠牲的精神が、眼目中の晴である。

萬一右の最後の斷言に對して、片手落の主張なりと思ふやうな心懸けの主婦であつては、場合の如何に關せず、未だしい人であらう。但し斯様な主婦を薰陶するところに趣味があるでもあらうが、さういふ工合では勢家庭の各員等の趣味涵養が後廻はしにならねばならぬ嫌がある。況してさういふ主婦などが、世に流行せる趣味の涵養を云々したとて、逆も健全な望ましい趣味の涵養は出來さうにも思へない。何事も根本が大切である。其根本が確立すれば、假令社會は如何に錯雜せる活劇場となるとも、家庭内はとこしへに、曆日だになかりさうな桃源郷であるであらうと思へる。

其二、家庭の各員、

家庭には、家長主婦の外に、親もあり子もあり兄弟もあり姉妹もあつてもあらう。我邦では斯か

る現象は敢て珍らしいことはない。社會の上流と自から許せる家庭には往々不自然極まる乾燥冷索なものの、あるを茲には除外例として一般に上中下流に通じて健全なる家庭らしい家庭には自然に人數が少くない。

斯く多人數の家庭にて、全く平穩無事と氣藹々の中に生活する例も少くない。所謂無爲にして化するものが無いではないが、人情の常としてよい上によいやうにと望蜀の慾から何かと自から好んで事情を起しもする。又好んで起さなくとも動もすれば起るのが常態である。家庭の各員が盡くさうと悟つてしまへば別段何ともないであらうが、悟つたつもりでも心得たつもりでも尙ほいろ／＼事情が起る、それが人生の趣味あるところであらう。

實際、少壯な者から、年寄のする事を見れば、十に一つや二つは、琴柱に膠するやうなことで、石橋を敲いて渡るやうなこともないとはいはぬ。斯かる場合でもそれが往々少壯者が經驗に乏しき爲に夫程までに丁寧にしなければならぬことを知ら

ぬ爲の誤解であることが少くない。されば少壯者が常に年寄に對しては心地よげに従順にすることは、聰明な心懸であり至當のことであり人の道である。それが出来ぬは、年若者者の生意氣である、我儘である、社會は個人の我儘を參酌なしに嚴罰に處するけれども、家庭内では大抵見逃がして貰つて居る。それに増長して益我儘の募るやうでは、家族に對して相濟まぬのみか、後日社會の一員たるべき自身の資格を自身で破壊しつゝある一種の自殺的行爲である。慎むべきは我儘である。之を取除く心得は自他の趣味涵養上第一の心得たることを念としなければならぬ。

次に、年寄の方から、年若い者のする事を見れば、十に六七も雲に架け橋カスミに千鳥所謂泰山を挟んで北海を越えんとする癖で不安心の點も多からうと思ふ。之が爲に年寄が自己の經驗から少壯者への親切から時には若者には小言をいふのである。けれども又一体に人間といふものは自分の昔を忘れて現在の自分で人を俾して云々する傾向を持つて居るものである。誰でも一度は小兒であ

つたにも拘らず、中年の者が小兒に對して頓馬な推測をしたり、老年の人が少壯者に對して取越し苦勞をしたりすることが往々ある。夫故に年寄が親切から少壯者に教訓戒飾を加ふることは誠に少壯者の感謝すべきところ、假令恩を恩と當時は感ぜずとも、子を持つて知る親の恩、後日必ず覺るところあるに相違ないから、茲少し寛容を垂れられて、多少は『まわ年若い者であるから』といふ思ひ遣りを心に念とせらるゝことが出来たならば尙ほよろしからう。

其思ひ遣りも「わざとならぬ思ひやり」にせらるれば一入年若い者の仕合である。『秋茄子を嫁に食はずな』といふ諺がある。之は秋茄子には種が多くアクが強くて身の爲にならぬ殊に身ごもれる者が食べると其害が胎兒にまでも及ぶといふ心配から、舅殊に姑あたりが親切のあまり言ひのこしたものであるさうだが、同じ親切な思ひ遣りならば成るべく平等に思ひやるのが肝腎で、嫁に毒なものあらば他の家族にもまわ大抵は毒であらう。さるに殊に嫁のみに姑が親切であるのは何れ孫の

可愛さももつて居ることとも思へるけれど、さりとて矢張り過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しである。之が爲に品性の修養の足りない仲間では、秋季には誰も食事が進む、殊に乳呑兒のある嫁などは自分で不思議なほど進む。ドンな材料でも小言がない、況して秋茄子の小さなのが食膳に上つては風味更に一段である。凡て味よいものをば憎む者には食べさせたくはない。嫁は元來憎いもの夫れ故に嫁には秋茄子を食はずなと姑達がいつたのだと誤解するものもある。斯いふ工合になることもあるから、年寄の親切な思遣りも、或程度までは家族の幼長の序によつて等差のあるのは至當のことではあるが、あまり一方に殊更に傾いたことにならぬやうにせらるゝならば元來親切からの世話が一入嫁に有難く感ぜらるゝであらう。

以上、年少者の心地よげなる從順、年長者のわざとならぬ同情、此二大要件を具した上に今一條件、即ち右の双方の中何れか多少ドウあらうとも、其一方否自餘の一切に、之を調節して和平ならしむるが各自の責任であつて各自の幸福、即ち我

一家の幸福であるといふタンナミが出来て居れば、茲に家庭は益桃源郷の本色を發揮するであらう。萬々の場合に右の心懸を有する者が多數の家庭内に唯一人であつても、其一人の始終愉らぬ心懸けには何時しか他の多數も醇化せらるゝものである。一家一人を以て起るといふ詞は千古不朽の格言である。天下の事と雖さうである。況んや文字通りの一家庭をや。

其三、僕婢の事、

少し人数が多くなるとドウしても僕婢を家庭に入れねばならぬことになる。此事は大したことでないやうで其實、一家の平和と幸福とに割合に大なる關係を有して居る。特に兒女の教養上に少からぬ影響を及ぼし或は卑陋下劣、弊風に染み或は尊大倨傲の惡徳を長せしむるなど甚だ面白からぬ結果を來たすことがある。

之が爲に雇傭の際の選擇が最も必要だと一般にいつて居るやうであるが、實際さう詳しい選擇の出來ない事情もあり、又ドウせ僕婢として働かむとする者などの大多數にさう立派なものがありさ

うにもない、稀に存する掘出し物に當つたら思の外の仕事ともいふべきものであらうから、選擇の標準は、大体真面目で素直なものらしければそれ丈でもまあよからう。併し雇傭してから後に可なり仕立てるつもりでかゝれば大底は用に立つものである。何は兎もあれ、既に家庭に入れた以上は、少くとも彼も人の子といふ同情を以て遇してやりたいものである。出來得べくは殆んど家族と區別するところもなく常に此僕婢も己の子の家族だと思ひやつて世話してやる意氣がわりたものである。同情と意氣との前には鐵腸國土と雖尚ほ功名復た誰か論せんと出でくる。況んや單純なる僕婢をや。人を遇するに同情と意氣とを以てする美觀には、其家庭以外の傍觀者にさへ言ひ知れる愉快と頼母しげとを感ぜしめうるはしき趣味を涵養せらるゝものである。況して其家庭内の人々に於てをや。

以上のやうに根本的の要件から段々に具足して來れば、我邦の家庭のやうな多人數の家族のあるのは、親子長幼等の關係などを幼年者にそれとは

なしに心得しむる榮ともなつて一層趣味あることと思ふ。

其他の要件としては、家庭の事はドウしても大部分は主婦の技倆を要すること故、主婦に事務辨理の腕もほしく、特に經濟運用の胸もあつてはしい。が何より先は上來述べた氣立てであらう。

其四、家風の事

以上三項に述べ來つた根本的要件が具足して、それが引續いて實際に行はれて、何時しか一種の家風といふものになつて終へば、一層面白からうと思ふ。

第二節 飲食の事

元來健全な趣味涵養をなすには、何より先に、多少物心の出來た者以上の者共の『世の中は自分の思ふ通りのみに行けるもの』とか『面白くことのみあるもの』とかいふやうな雅氣を、根から抜いてしまふことにしなくては埒が明かぬと思ふ。飲食に就いてもさうである。

由來、味には善悪がない、又美醜もない、唯、好き嫌ひ、風味不味などいふことはある。何物が

斯く

味に好悪を來たすかといふと、
第一、味覺に各自特殊性が先天的にあること。

例へば、甘黨、辛派、鹹口、淡口、酸好、脂好み、焼組、煮仲間、つくり連といふが如きそれである。而して味に慣れるにつれて、自づと敏く感覺するに至つて所謂酒キ、菓子キ、の如き顯著な差別作用を起すやうになる。

第二、味覺そのものが變化を好むものなること。即ち珍膳も毎日食へば味ならず、自分の家に買つた菓子も味よいが、思ひがけなくも遠方からの到來の些少のそれが一入味よく感ずることが多い。之も材料に存する味そのものよりも由來の變り製法のかはりなどより、我知らず味が左右せられて居るのである。

第三、消化力の如何に由來すること。即ち一般にいへば胃の腑の作用の達者なものは、その弱い者よりも、味よく感ずる場合が多く。又丈夫な胃の腑を備へて居る者共でも、室内に終日籠居する坐業家となると、内主の心盡しの膳部にさへ不感謝の色が動もすれば現は

れ、右向け左向け一二三四で朝風くから元氣にやつて居る兵隊となつては引割の半麥飯の長持一棹を半粒も残さずに平ぐるのを見て、味が口中舌部で味はるゝことながら其材料受取所の如何に左右せらるゝことがわかる。

第四、視覚嗅覺の助勢に左右せらるゝこと。即ち調理法、及び排列法などより来る材料の外形と色彩と香氣などに、著しく左右せられて居る。延いて材料を容るべき器、之を盛るべき具などの如何にも少からず左右せられて居る。

約めていへば、味は勿論味ふべきものに由るものながら、之を味ありとするは人の味覺であつて、而して其覺は如上の諸條件に支配せられて居るのである。従つて静觀すれば、味なしといつて食物に小言をいふのは多くの場合一種の滑稽である。年少の患者に心得させたい。長き年月の間には稀には健康を損することもあらう。極稀には不健康に始終する人もあらう。誰も自から好んで病む

人はないこと故、此等患者の動もすれば、我知らず内心に不満足を感じることにあるのは無理もないことで寧ろ同情すべき點も少くないが、總じて患者が殊に飲食物に不味を感じるは多くの場合に於て有り勝ちのことである。何時にても命數が盡くれば夫迄だと覺悟をして居りさへすれば、味位のこととは、さう大した問題ではなからう。それをタンナマツに、調理の細事に涉り、器具の取扱の小節につけ、殊に材料の如何に關して、云々するやうでは、第一に夫れで折角の味を自分から打毀はして終うのである。凡人の人情殊に年若きものゝ常情とはいひながら、若し斯かる際にも自から心氣を調節する勇氣が平生の半分丈でもあるならば誠に自他を幸福ならしむること更に一段であるであらう。

年少の息災な者に心得させたい。何が味がよい、かゝ味がどうのといふことは、達者なものゝ口にすべき詞であるまい。

此世に客に來たと思へば何の苦もなし、朝夕の食事も旨からずとも褒めて食ふべし云々。

伊達 政宗

随分無理な註文のやうではあるが、味よく食べやうといふ心氣を据えよ、といふところ、流石に味がある。由來人間は食ふ爲に生れて生きて居るのでなくて、生きる爲に生れて食つて生きて居るのである。即ち飲食は目的に非ずして手段である。此要領をよく會得して念々之に常住する境に達すれば、茲に漸次に、食疎食、飲水、曲肱而眠、樂在其中、といふ趣味をさへ解することが出来るのである。幸にして此境に入れば、一片の肉一杯の茶、尙は暢然として大牢の滋味あるを感ずるであらう。

斯心を以て食膳に對せば、何れの時、何れをとるとも可ならざることやある。殊に晚餐は何れの家庭にありても最も趣味ある機會であるであらう。内では心をこめたる準備して待つて居る、外からは劇務から凱旋して来る。茲に隔意なく團樂して食卓を圍むことが、其各員に更に捲土重來の元氣を涵養すること蓋し百萬の援兵にも超越するものあるであらう。斯くて罪なき談笑も始まり無

邪氣な腕白も稀には演ぜられて一家何時しか笑ひの樂園に化することもあらう。その上に珍膳嘉肴があらば尙はわるくないまでのことである。余が知人なる某トルは日多忙を極めて居るが、一週に一回丈は必ず家族一同の晚餐會を開くことに定めて、其夕には令夫人が先鋒で主人ドクトル兩親兒女などが中軍で、書生小間使別當炊婦に至るまで皆相率ゐて後衛として参加し、以て一大圓陣をつくつて、一切平等恰々洋々として暢神歡娛する仕組にやつて居る。親友の飛び入りなどは大に歡迎するところであるさうである。斯いふやうなことも面白からうと思へる。(ついで)

●●●●●
海洋消滅の期
 ●●●●●

地球は次第に乾燥して終に海なきものとなるべしとは星學者間に於て一般に信ぜられ居る説なるが有名なるローウエル教授は此程センチユリ雑誌に於て此事を論じて曰く從來火星の表面に海ありと信ぜられたるは誤謬にして火星には最早海なく地球も幾千年の後に火星の如くなるべし此事は往時綠樹繁茂して美麗なる都會を爲したるパレストアイン及びカミーゼ等の土地が今や砂漠に化したるを見て明かなり但し火星の状態に在る間は尙人類の生存に適し月世界の如くなるに及んで始めて人類滅亡するものなりと

育兒の經驗

光藤泰次郎

大自然に接せしめると、都會に生れた子供、殊に東京のやうな大きい都會に生れた子供は、動物なり、植物なり、山なり河なり海なり、此の天地の大自然に接する機會が少い、随つて自然に對する趣味が乏しく、自然に關する智識が缺乏するやうに思はれる。しかし子供の天性は決してさういふものではない。彼等は皆小植物學者である。小動物學者である。小礦物學者である。苟も機會だにあれば、植物を研究しやうとするのである。動物を學ばうとするのである。礦物を研究しやうとするのである。自分等が田舎で育つた時のを考へて見ると、實に天地大自然の懷に抱かれて、育つたものである之に較べて見ると、東京の都會に生れた子供は實に可哀さうなものである。彼等は此の天地大自然の懷を知らないものである。而してそれは殊に中流以上の子供に一層多いやうに思

はれる。それ故に子供を教育して行くには、どうしても此の天地の大自然に接して、子供の本能を満足せしめ、後來の自然に關する知識の基礎を造らせねばならぬ。

花を愛することは極めて幼い時から、赤き、白き、黄に紫に、四季折々の花を折り取つて、之を持たせ、さうして目を喜ばせ併せて精神を慰めるやうに仕向ける。一人あるきが出来るやうになれば、自ら草花を摘ませ、之を持つて喜ぶといふ風に仕向ける、櫻の花は爛漫と咲き盛り、梅の花の馥郁とかほるのをば、あゝ奇麗だ、あゝ美しいなど、共に之を慰め、共に之を樂しむといふ風に仕向けると、子供は忽ち花好になつて仕舞ふ。さうすれば常に植物に接するといふ利益があるばかりでない、美しい感情を養ふ助となるのである。

2、花の名を教ふると 子供は子供相應に疑問を持つものである。疑問を持つてば、父なり母なり、兄弟なりをつかまへて、之を解決しようとするのである。かういふ機會を利用して、普通植物の名位は教へ得られるのである。最初注意して緒を

開いておいてやれば、子供は發動的に名を知らうと勉めるのである。決して子供の脳頭に無理をさせずして、自然に且容易にさせ得るのである。庭に下りて遊んで居る際などには、名もなき小さい花などを取つて來てこれは、何ですかなどと尋ねて父母を困らす位になります。それから少し進んでは花の色を尋ねて見たり、或は花瓣などいふ花の部分の名を教へたり、或は櫻の花の花瓣は幾つあるか、梅の花の花瓣は幾つか、櫻の花と梅の花の花瓣とはどこがちがふかなど疑問を發して、調べさせたりすると、子供はなかく鋭敏で、能く事物を観察するといふ習慣をつけ得られます。

3、植木の生活をさせる。なほ進んでは、朝顔なり、余線花なり、鳳仙花なりの種子をまかせて、其の發芽の状態を観察させたり、毎日水をかけさせては、日々に發育するを樂しませ、種々世話した結果、奇麗な苔を持ち、立派な花が咲くの喜ばせる、かうなると植物に對する興味は一層深くなるやうに感ぜられます。これは一寸の注意で出来るものであるから、縁日で花を買つて來るよりも、

種子を多くとからやらせたく思ひます。子供は妙に之は私の蒔いた朝顔だ、こんなになつた、こんなになつた、其の喜びは大したものでありませぬ。

4、郊外の散歩にとまふを。市街の空氣はあまり清潔でないので、折々は郊外に、散歩を試みしめ、遠足に同伴したりするを、身體の健康を増進する上からいつても大へんよいのは、今さらこれに言ふまでもないが、天地の大自然に接するといふ上からも非常に益があるやうに思ひます。公園の逍遙も無論よいには相違ないが、しかし公園内の花木は、一切折り取るを禁じてありますから、小植物學者の研究には、あまり適當してゐるとはいへませぬ。それよりか玉川縁とか、田端とか、大久保とか、廣々とした郊外の地の、しかも草花の採集自由勝手であるといふ地が宜しい。若しかういふ地につれて行かうものなら、今ならば、葦とかたんぽぽとか、蓮花草とか、之を採集するに熱中して、なか／＼歸らうとはいひませぬ。全く大自然の懷に抱かれて、天地と一體になつたの

かと思はれます。郊外の散歩が如何に子供の頭腦を刺激するかは、日曜の來るたびに、玉川へ行きたいとか、田端へ遊びに行きたいとか、切望するのので分ります。子供等は、曾遊の樂しさが新しい望を起すほどに深く且切なるものがあるのです。5、昆虫類を捕ふると、犬を恐れて嫌ふとか、猫をこはがつて泣くとか、其の他馬や牛を見てひどく恐るるのも、或は子供の天性であるかも知れぬ、彼等は自識しなくても、生を求め死を避ける自然の本能からして、生命の不安を感じるのであらう、此のやうなる子供であつても蟬とかトンボとか、蝶々とか、美しい可愛い昆虫を好まぬ子供はなからう、彼等が動物に關する智識は最初この昆虫から得るのではないかと思はれる程である。炎帝漸く威を逞うし、東京の芋屋が悉く氷屋と變化し終つた頃は、地の中に居つた幼虫が蝶に變じ、水中に居つた幼虫がトンボになる時なので、トンボ釣り今日は何處まで行つたやら、の句は必ずしも田舎の子供にのみ當てはまる譯ではなく、随分東京の子供にも此のやうに考へ得られるのである

扱子供がトンボを捕へて、之を糸につなぐはまだしも、其の腹部を切つて、どこそこへ味噌を買ひに行けなど、いつて放すのを見ると、如何にも動物虐待であつて、かやうなものは一切禁絶したいやうにも思はれるが、しかし私は判断がつさかねる。とんぼと蟬とに就いて動物虐待を一切禁絶する利益と、よしや多少の虐待をしようとも、子供が自然に接して得る利益と何れが大きいであらうかと、いや私はどうも蟬が美しい聲を出して、子供を誘ひ、トンボが奇麗な姿をして子供の目を引きつけるのは、彼のトンボとか蟬とか、自然と子供との間を結びつける爲の使命を帯びて來て居るのではないかと私には思はれます。それ故に最初は蟬をとりトンボを捕るを一切禁絶しやうかとも考へたともありましたが、しかし動物虐待とか何とかを眞向に振りかざして、子供が天然に親しむといふ本能を抑壓し、却て後來の發展を妨げるやうなものがあつてはならぬと考へついで、暫く動物虐待説を撤回して、子供の自然にまかせるとしました。茲に子供は風の子と申しますが、これは

寒き風にも恐れぬといふを言ひ表はしましたものでしようかし。或る意味からいふと子供は自然の子である。本能の發動するまゝに、熱くて熱くてたまらぬといふ日にも、ちつともふめず恐れずトンボを捕へ、蟬を捕へるに熱心し、捕へてからは翅をきつてとばす、いぢつて鳴かす、色々々して遊んで居る。かくして能く自然に接し、自然と親しみ、自然を了解するのである。それだからかういふ場合に、どれが雄虫であるか、雌虫であるか、翅は幾つあるか、足は幾本あるか、身体は幾つの部分から成り立つて居るか、頭をなやまさずして知らしめることが出来る。自分の経験によるに、かういふ風に自然に接し、實物を取扱つて得たる智識は實に確實であつて決して忘却するものでない。我々の受けた不完全な小學校の理科教授や、尋常師範時代の完備しない博物教授よりはよほど價値があつたやうに思はれる。それ故子供が蟬をいぢくり、トンボをいぢくつてゐる際に、一寸疑問を發してやれば、子供は精密に觀察して、確實な智識を得ると同時に、今度は色々の疑問を

こしらへて、あまり博物に堪能でない、父母をこまらせる程に進みます。其の他いろいろの蝶をとらへ、いろいろの昆虫を捕へるも同様である。

6、昆虫を飼育すること、田舎につれて行つて、さきりぎりすを捕へるとか、松虫を捕へるとか、鈴虫を捕へるとかするのは、子供に取つて無常の楽しみである。捕へ得たる昆虫を放しがひにして毎夜鳴く音を樂しむのは一段と面白いですが、更に籠に入れて飼育するのは、層層樂しいのみならず、餘程利益になるのです。即ち子供は之によつて、昆虫が生活状態を知り、飼育法を知る譯であるから、餘程價値があります。東京にあつては、松虫鈴虫蠻虫などを捕へるとは出来ないが、籠虫賣が賣りに来るから、それを買つてやつて、籠を養させ、自ら茄子などを切つて飼育する世話をさせるがよいと思ひます。子供は自分の好きな事はちつとも勞を厭ひません、喜んで其の骨折に任じますから、是非都會の子供にもかういふ経験を傳させるがよからうと思ひます。昆虫の自由と束縛するから、可哀さうであるといふ動物虐待論は、

しばらく引こめてかいたがよからうと思ひます。
 7、魚類を捕ふること、田舎の子供は、小さい時分から、水に親んで、笹などを以て、目高をすくひ、鱒をすくひ、鮒、鯰などをすくひ、だん／＼進んでは、川に釣を垂れて、魚を釣るなど、自由に出来るけれども、都會の子供はどうしてもかういふ事に縁が遠い、縁日で金魚や鯉を買つて、之を飼ひかく位のものである。尤も随分河へ釣に行くものもあるが。しかし都會の子供の幾部分に過ぎない。それ故にふだん能く注意して、魚屋の店頭にあるやうに、魚は死んで居るものでもなければ、切身になつて居るものでもない、或る魚は海に或る魚は河に、活潑に游泳して生息して居る者であることを知らせねばならぬ。此の點に於ては、都會は餘程不便であつて、まだ思ふやうに、参りません。

8、鳥類を捕ふると、子供に取つては、花を折るより、蝶や蟬を捕ふ方が面白い、蝶や蟬を捕ふるよりも、潑瀾たる鮮魚を捕へるとは更に面白い。魚類を捕ふるよりも、空を飛ぶ鳥を捕へるとは更に

に更に面白い。いつでも獲物が大きければ大きい程興味も亦多い譯である。此の面白い鳥を捕へるとも、東京に於ては殆ど出来ない。田舎の子供は雀の巢をさがして、其の巢を破り、其の卵をこはしたり、或はチニウチニウとなく子供をつかまへたりして居る間に、雀の巢のかけ方や、いつ頃卵を産むかといふことや、子雀の嘴の様子や、何かを知るとが出来る。それから頬白や告天子やに就ても其の通りである。然るに此の點に於ては、都會の地は全然だめである。どうもかういふ機會が少いのである。僅に明白なりカナリヤなりを飼養するに止まるのであらう。しかしこれはまだ實行させません。

9、動物園や水族館を參觀させると、都會の地は天然物に接せしむる機會は甚だ少いが、しかしこれに便利なものがある。外でもない、動物園や水族館である。度々こゝへ子供をつれて行つて、象や獅子の如きものより、鳥類、魚類、貝類等に至るまで、實物を參觀せしむるとは、子供に實地觀察の大利益を得しむる譯である。此の一點は都會

が田舎にまざつた唯一の長所であらうか。

10、機会があつたら田舎につれて行くを、旅行なり、温泉なり海水浴なり苟も田舎に行べき機会があり、子供をつれて行つて差支ない場合ならば必ず子供をつれて行つて、或は廣々とした平野の中に遊ばせたり、或は雲に聳ゆる千仞の山につれて上つたり、或は混々と湧き出づる温泉に浴せしめたりして、各方面から自然に接せしめるがよい。幾ら話を巧みにしても實際海を見ない人には、海を了解させるとは出来ない。汽船にのつて一度海をわたるか、或はドウドウと波音たかき濱邊に下り立ちて或は波をくいり或は貝を拾ひ或は釣を垂れば、どんな子供でもすぐによくわかつて仕舞ふ。山にしても其の通り、河にしても其の通りであつて、彼の百聞一見に如かずといふとは、子供の智識の程度には更に一層適實であると感ぜられます。



(まだある)

▲カル、ス温泉の商人 奥地利のカル、スパツドは有名な温泉場にして同地の人口は一万六千に過ぎざれども浴客は常に旅館に充溢して各地より商人の入込む者夥しく其商人は奥地利は勿論獨逸、佛蘭西、白耳義等各国の人種を舍み此等の商人八百餘人は絶えず各旅館に出入して其賣方の巧みなるも驚く可く大抵の浴客は不用なる物品を強て購求せしめられて歸途に之を持餘さるなすと云ふ

▲獨逸の寄贈書 獨逸皇帝は此程米國大統領ルーズベルトに一大圖書を贈りたるが其圖書は縦二、八〇米突(凡そ九尺三寸)横一米突半(凡五尺)厚さ九〇珊米(凡そ三尺)を有し獨逸の百科全書と稱すべき性質のものにして獨逸の風景を寫したる巨多の繪畫を挿し表装は美麗を極めたり其重きとは之を運搬するに馬車を要する程にして書中には獨逸皇帝の自筆にて「獨逸皇帝ウィルヘルム及び獨逸國民は此書を米國大統領ルーズベルト及び米國民に贈る」とあるも何等の書名をも附しあらざる由なり

▲新金鑛に蝟集する人 今より二三個月前米國の桑港より凡そ三百哩を隔つるネグア高地に赴きたる人々は同地方に於て砂金を發見して許多の利益を得たる由にて此事桑港に傳へらるゝや勞動者等群を爲して同地に赴く者多く從來人家絶無の地は僅々一個月の間に人口一万を算するに至り日々同地に入來る者二百人を下らず前日の價格一万五千圓の土地は翌日六万圓にて賣行く狀況なりと云ふ

▲新金鑛に蝟集する人 今より二三個月前米國の桑港より凡そ三百哩を隔つるネグア高地に赴きたる人々は同地方に於て砂金を發見して許多の利益を得たる由にて此事桑港に傳へらるゝや勞動者等群を爲して同地に赴く者多く從來人家絶無の地は僅々一個月の間に人口一万を算するに至り日々同地に入來る者二百人を下らず前日の價格一万五千圓の土地は翌日六万圓にて賣行く狀況なりと云ふ

玩具に就いて

和田 實

遊戯といふもちやとは附物である。殊に摸倣的遊戯などには尙更何等かの代表物がなないと充分な興味を起らないものがある。中にはおもちゃを俵つて始めて遊戯が成り立つものさへ中々尠くない。諸種の球遊びやお手玉遊びなどは此適例である。即ちおもちゃの存する所に遊戯が存するものと云ふても差支はない。故に幼児を機嫌よく遊ばせ様と云ふには能く其玩具品を整へて遣ることが必要である。即ち教育者は成る可く豊富な材料と最良の品とを彼等に與へんことが必要である。能く世間では無益に物品を消耗し去ることを毀損してしまふことをおもちゃにしてしまつたと云ふことがあつて子供に取つて甚だ迷惑な云ひ分で子供をして云はしめたらば必ず不平を云ふに違ひない。兎に角玩具と云ふものは子供の遊戯の爲めに必要不可欠からざるもので、従つて教育上極めて大切なものである。近來世の識者が大分此方面に注意して

來て或は衛生上から或は教育上から之を研究し様として居るのは誠に悦ばしい傾向と云はねばならぬ。併し茲に少し注意しなければならぬことは諺に所謂最貧の引き倒しで徒に玩具の缺點のみを批難して無益な玩具商のちめをしたり或は餘計な道徳呼ばゝりをして陶冶的價値の多い某種の玩具を退けたりする様なことである。兎角我國の教育は儒教主義の遺風で稍もすれば道徳の消極的方面にのみ子供を誘ふとする傾きがあつて方今の時世に切要な有爲な人物を造ると云ふ方面には自然注意を薄うすると云ふのは遺憾なことである。例へば彼のメンコ、根ツ木、など云ふ様なものは從來中以上の家庭に於ては非教育的の玩具として極力排斥せられたものであるが併し是よりも増して非教育的な賭博類の玩具は双六、玉ころがし等の名目の許に素張らしい勢で流行して居り中には随分特許品などもある様である。若し前者を斥けるならば後者の如きは無論捨てねばならぬ筈であるが夫れでは教育は餘りに偏狭窮屈なものとなつてしまふに相違なく子供の方から云ふても決して滿

足して居るものではないのである。然らば子供の持つて居る玩具には全体如何なる種類のものがあつたのか其分類表は何んものかと云ふには是は大別すると四個の方面から研究しなければならぬ。即ち第一種は普通玩具店で商つて居るもので所謂玩具職人に因つて製出せられたものである。第二種のもの元來は玩具にあらざる實用品を子供の勝手で一時玩弄用にしたもので踏み台を持つて來て馬にしたり眼鏡を面にし締棒を竹刀に代用して擊劍の眞似をするなどば皆夫れ々々實用品を玩具に借用したので吾人は之を借用玩具と稱へて居る。第三の種類と云ふのは作業の材料となる可き諸種の原料を指すので紙、豆、籤竹、粘土、麥稈等の類である。以上の三種は最も普通の玩弄品であるが最後に今一つ必要な玩弄品がある、即ち諸種の繪畫類が夫れである。是は玩具の中に入れるのは多少穩當でないかも知れないが併し玩具の意味を廣く考へて遊戯用の物件を悉く包含するものと思へば是等も是非入らなければならぬものである。即ち吾人が幼兒教育上玩具と稱へて居る所のもの

の中には普通の玩具は勿論のこと尙其外に諸種の假用物や繪畫の類並に色々な手細工の材料迄も含んで居るものである。尙進んで等玩具の各を細分して見ると次表の通りである。

普通玩具

甲純粹玩具

- 一、觀察的玩具
- 二、練習的玩具

乙模造玩具

- 一、日用家具ノ模造 膳碗、茶碗、七輪、手桶、火鉢、机、釜、等
- 二、樂器ノ模造 笛、ラッパ、太鼓、等
- 三、武器ノ模造 刀、サベル、鐵砲、太砲等
- 四、舟車ノ模造 人力車、舟、ボート、
- 五、職業具ノ模造 大工用具、電車々掌用具、
- 六、動物ノ模造 人形及面、人形類、假面類、獸、類、馬、犬、牛、猫、魚、類、虫、類、等

七其他諸種ノ模造

歴史的玩具

- 一 雛人形
- 二 五月蟻
- 三 其他

假用玩具

- 一、家 具 踏み台机、椅子、籃、等
- 二、文房具 筆、ペン、鉛筆、繪の具等
- 三、細工具 小刀、鋏、鋸、鍍錫等
- 四、自然物 動物、植木、菓物、石、土、木葉、等

作業材料

- 一、列べ方 箸、輪、貝、色板、小石、
- 二、つなぎ方 花、木實、南京玉
- 三、積 方 木片、石片、煉瓦、
- 四、くみ方 草葉、條板、
- 五、紙細工 紙
- 六、豆細工 豆、ひこ
- 七、縫取り 糸、針、紙、
- 八、粘土細工 粘土、へら、

繪 畫

甲、人事界を表はしたるもの

一、歴史もの

二、浮世繪もの

乙、自然界を表はしたるもの

一、博物物的のもの

二、景色畫

丙、お伽的假作物

一、童話もの

二、ポンチもの

以上諸種の遊戯用物品は何れも幼児教育上大切なもので一方を探れば他方は捨て、もよいと云ふ譯には行かぬ筈のもので、たとへ、在りと在らぬる普通玩具を買ひ調へたとて夫れで以て一切子供は他のものを要求せず居られるかと云ふに中々そをばゆかぬ。子供は多方の興味を以て居るし此興味は是非とも多方面に發達させて遣らなければならぬ。従つて其玩ぶ所の物品は自然多方面に諸種のものゝを要求する筈のものであるから教育者は

妄りに自己の好尚に因つて偏狭な選擇をして幼児の個性を損ずる様なことをしてはならぬ譯である。

例へば繪畫は幼児の觀察的遊戯には無くて叶はぬものであり、假用玩具は經濟的に模倣遊戯をするこゝとが出来し作業材料は以て幼児の工夫力を増進せしむるに必要であると云ふ様な次第で夫れ々各種類に於て獨特の教育的價值を持つて居るものである。故に一般に教育上から見れば何れの玩具も捨てる譯には行かぬものである。尤も同じ觀察的玩具若しくは練習的玩具の中即ち同種類の玩具の中には必ずしも悉くの玩具を必要とする譯ではない、此場合に於ては個々の品物に就いて充分其教育的價值を調べた上で之を取捨することは決して差支ないことである。然らば其教育的價值は如何にして之を調べる事が出来るかと云ふには實験經驗に徴するより外に仕方がない。元來玩具の教育的價值と云ふものは玩具其物に必然具備して居るものではなくて實は其玩具を遊ぶ遊戯の活動其物に從屬して居る問題である。故に玩具

は如何に高價で精巧であつても單に夫丈では未だ其教育的價值を云ふには少し計である。其玩具を以て何れ程の遊戯活動が出来たかと云ふ段になつて始めて教育的價值が定まるものである。然るに世の父兄の多くは此道理に注意しないで徒らに高價な、そして高尚に過ぎた美術的置物然たるものや若しくは諸種の學理的器械様のものなどを買ひ込んで以て大に幼児教育をした積りで居ることが聞々あるが誠に無益なことである。彼玩具商が常に仕入の方針を子供の氣に入る様なものを集めんよりは父兄の氣に入る様なものを集むることの方に置いて居ると云ふのも此處等に原因して居るのではあるまいか。吾人教育者の一考す可き處である。尤も家の生活程度で比較的不急なものにも充分な費用を掛け得らるゝことがあるから富豪と細民とを同日に論ずることは出来ないが併し大体に於ては左のみ費用を掛けずとも必要なる各種の玩具を調へることが出来様と思ふ。玩具製造人などは大に此邊に注意して貰ひたいものである。昨年の東京博覽會などに出品せられた教育的玩具と銘

打つたものを見ると何れも皆觀察遊戲に供する種類の一つに限られて然も價が頗る高い従つて普通の家庭には入り得ない様なものばかりであつた。此の如きは畢竟玩具と遊戲との關係に就いて充分なる研究がない爲である。

更に眼を轉じて兒童の年齢と玩具との關係を調べて見ると滿一ヶ年迄の幼兒は初めは風車かしやぶり、がら／＼等の純粹玩具が重で模造玩具は殆んど入用がない。假令稀に用ゐることがあつても其は單に物品として玩具に假用したに過ぎないで模造玩具本來の性質は利用されて居ないものである。故にか宮詣りの犬張り子などは決して幼兒の玩具として直に有効に使用されるものではない。要するに乳兒時代に於ける幼兒の玩具は初めは單に衝動的慾求に應ずるものより漸次追求的觀察的經驗的のものとなるので此時代には凡べての普通物品例へば茶飲茶椀、茶台、等が手當り次第に玩弄されるもので、斯る傾向は六ヶ月位から滿二ヶ年位迄は繼續するものである。併し二才の終り頃から之と併行して模造玩具が大部興味を牽く様に

なる、そして其子供の活動と性質とに應じて多くは某種の模造玩具を殊に悦ぶ様になるものである。第三年に入つた幼兒の生活は一層玩具と親密な關係を有する様になつて玩具なくしては逆も遊ばれぬ様になる従つて使用する玩具の種類も殆んど前述の各種類の全般に亘つて居る。此有り様は唯程度が漸次高くなると云ふ丈の差違で滿十年位迄續くものである。例へば始めは小さな粗未な、ほんの型ばかりに出來て居た紙製の馬に満足して居たものが今度は精巧な標本的のものを要する様になり其使用の方法も漸次複雑になつて或は乗用として欲がり或は机上の裝飾として欲がると云ふ様になる。併し兒童が長して十一才以上となると餘程其遊戲の様子が違つて來て盛んに智力的、技術的若しくは作業的遊戲を遣るので玩具も自然之に適合して多くは純粹玩具の練習的のものを要するか若しくは高尚な作業材料と諸種の作業用具とを要する様になるものである。就れも兒童の智能を啓發し社会的陶冶を施すに必要なるものである。而して遊戲も此時代からしてそろ／＼と本來の遊

戲的特質より超出して漸次に純粹の勉學や勤勞に移行して行つて遂に十四五才の頃に至つて兒童期を去ると共に最早玩具の必要がないものとなるのである。尠くも幼兒教育上に於ける意味に於ての玩具は其必要を減ずるものである。

▲電信の世界一週時間 丁抹コーペンハーゲンの一新聞は各電信線の速度を試験せんが爲めに去月興味ある實驗を爲したり即ち各五語より成る二通の電信を一は東に向け他の一は西に向け共に世界を一週して己れの新報社に到着すべく同時に打電したり其結果上海、紐育倫敦を經由したる東方線は三時間と卅三分を費して歸着し倫敦、紐育上海を經由したる西方線は三十分後れて着したる由にて電信の中繼所は孰れも八個所なりしと

▲世界に人口の溢るゝ時 最近の調査に據れば世界の豊饒なる土地の面積は凡そ二千八百萬平方哩荒野の面積は千四百萬平方哩砂漠は百萬平方哩にして豊饒なる土地一平方哩に二百七人荒野一平方哩に十人砂漠一平方哩に一人を限度として住居し得るものと假定せば世界に人口の棲息し得る限度は凡そ六十億人なり然るに現在の世界の人口は凡そ其四分の一なるを以て現今の人口増加率を以て進まば今後凡そ百六十五年を經過すれば世界の人口溢れて衣食に窮するに至るならんと

○統計學上の結婚

鹽野生

○日本では女の子より男の子が、澤山生れる、その割合は、女千人に男千二十四人であるが、死ぬる事も女よりは、男の方が餘程多い、そしてお仕舞にお爺さんよりお婆さんが非常に多くなるのである。今の所では女より男の方が身体や精神を餘計に使ふ、是等の事がつまり男が女よりも澤山死する原因であらふ。

○結婚の時期に於て男女の数は、どんな比較になるかと云ふに、是も統計で知つた所の日本人の結婚の一番多く行はれる時期即ち婦人の廿歳より廿五歳男子の二十五歳より卅歳までの間に於て、男子の数が女子よりも、三四十万人不足して居る、随分大した數だ、どうです、皆さん大人しくしなければ、お嫁にいけない事になる、………ナニ私達はお嫁なんぞは大嫌ひだ獨りの方が餘程宜いといふ方もあるが、それは大に間違つて居る。

○結婚したものはせぬものよりも、一般に長命じ

やと云ふ事が、是又統計上の事實である、それは恐らく結婚するものは、せぬものよりも身体も健全であり、また精神も盛かだからであらうと思ふなせといふのに妻君を貰ふたり、夫を持つたりするのには、誰でも弱い者よりは丈夫な者、頓馬よりは發明のもの、怒りつばい者より柔和なものと出来る丈氣を付ける、即ち一般に於ては配偶者を得るものは徴兵と同じ様に人選といふ事になるのである、外國などでもミセス／＼と名付る婦人が非常に多い所で、實際調べて見ると中には結婚せぬ人が澤山ある、即ち婦人として結婚した方がせぬよりも、自然肩身のひろい一例であらうと思ふ。

○此處に結婚に關係して起る所の離婚といふ悲しむべき事がある、そして是は誰でもいふ通り日本一手販賣の姿である、外國では離婚の數は一萬組夫婦に就て何百或は何十などと數へるのじやのが日本では結婚の殆んど三分の一が破鏡に終つて居るのである。

○そして其の離婚の時期が夫婦になつて何年位が

一番多いと調べて見るのに離婚總數の三分の一弱四分の一強は一年以内に別れて居る、外國の離婚は十年位のが一番多いといふ事だが、どうせ別れるものならば、早い方が萬事勝手かも知れないが併し是を以ても、我國離婚の最大原因は互に知る事の不足であつたためであると云ふ事が推し計られるのである。

○夫れに今日交通が便利のために、又一とつ結婚の爲めに不安心な事が出来て來た、なぜかといふに昔は東京でも田舎でも同じ人間が一つの所に、随分永く住んで居たから、お嫁でも貰ふといふ時に、近所に行つて質して見るとあの娘は、あんな顔して居るが、出戻りだとか、夫から家庭の様子まで何でも委しく分つた、此の頃では「あの方は一体何國でせう」近頃此方へお出でになつたんで御座んすが……「實家は農家でせうか夫ともお勤めで……」「いづれ「近縣の方だといふ事で……」など、一向要領を得ないです、つまり凡べての事情が不十分で夫婦になつて仕舞ふから、後から「意外のぼろが出て來るのです。」

○以上の事實よりして離婚の一大原因は男子も婦人も適當なる交際の門戸を開きあたへる事の出来ぬからである、しかし其の男女交際の方法に就ては最も慎重なる考慮を要せねばならぬ、今日一般男女の有様と、男子が婦人の、婦人が男子の前に出て少しも怯れず、また慣れたとて戯れわはぬ様にする迄が骨である、男女別ありといふ事が頗ぶる形式的に解釋されて居る様じやが、私は男女交際の場合に於てこそ此の言葉が最も必要であらうと思ふ、即ち男女互へに尊敬して犯さぬといふ事が最も此の「別あり」の意を得たるものでありませう。

▲天氣豫報の起原 各國に氣象臺を設けて天氣を豫報するに至りたるはクリミヤ戦争以後の事なるが獨逸氣象學者ヘルマン博士の説に據れば太古の希臘時代に於ても氣象を豫測して豫報を市中に掲示したるとありバレンスタイン市の盛なる時代に雨量計を用ひだすとあり英國にては牛津に於て僧侶メーブルが千三百三十七年に氣象觀測を爲したるを嚆矢とする由にて其記録は現に同地のメソドレイアン圖書館に存すと云ふ。

此ごろの料理

石井泰次郎

鰹の麥酢のこしらへかた、
あぢの、うろこをふき、えら及び鰯を出し、洗ひて申をうち、鹽をふりかけて、鹽焼になすなり、たで酢は、たでを摘みてよく洗ひ、摺鉢に入れて摺りなけば摺れたる時、やわらかき飯粒を少し入れて、摺り、よく〜摺りて、酢を程よく合するなり、
焼きたるあぢを皿に盛り、右のたで酢をかけて出すなり、

合蒸しさより

椀 小口松露

合せむし細魚の仕方は、さよりを腹の方より開き骨を取り、小骨をすき取り、しほ水に浸し置き、(鹽水は水二合に、鹽三勺位の割合にてよし、平皿などの中につくり、其中へさよりを並べ入れて置くなり、暫くして取出し、布巾にて水氣をぬぐひ、

二枚合せ（腹の方を合するなり）、竹の皮の上の
 せて、蒸籠に入れ、湯鍋の上にかけて、強き火に
 て十七八分間蒸す
 松露は、洗ひて湯煮し、小口より一分厚さに切り、
 同じ椀の汁を少しとりわけ、ざつと下煮をなす
 ふきは、湯煮して皮をむき、一寸二三分の長さに
 揃へて切り、下煮をなす、
 以上の品々用意なして、次に椀の汁を作る、先づ
 水をはかりて鍋に入れ火にかけ、煮え立ちかゝり
 し所へ薄くけづりたるかつをぶしを入れ（かつを
 の粉になりたるは入るべからず、汁にござりて悪
 し、粉は煮物をなす時の煎汁につかふべし）、直に
 上に浮ぶ泡をすくひ去り、一分間にて鍋をわろし、
 蓋をして一分間置き、鉢などの中へ絹ふるひにて
 濾し込むなり、是を一番煎汁といふ、一番だしを
 取りたるあとのかつをを、再び鍋に入れ水を加へ
 て五分間ばかり煮出したるを二番煎汁といふ、一
 番だしは、椀盤、茶碗などの汁をつくるに用ひ、
 二番煎汁は、煮物、みそ汁をたつる、などに用ふ
 るなり、

さて一番煎汁を鉢に入れ火にかけ、煮立ちたる所
 へ、煎汁一升につき、醬油四勺、みり酒三勺、鹽
 二勺、等を入れ、味を試み、あとより醬油五勺を
 足し入るゝなり、味を試みて、醬油の質によりて
 わまきとからきとあれば、からき時はいれずとも
 又少なくするとも、あまき時は、多く、その時の
 かげんにて入るべし
 右の汁を少し小鍋に取りわけ、それにて松露ふき
 等を下煮なすべし、
 むしたる細魚を椀に入れ、さよりは蒸す時、三つ
 位のたけに切るべし）、松露、ふき等も入れて、前
 の汁を上よりそゝぎ入れ蓋をして出すべし、
 鮑の貝焼のこしらへ方
 わはびを、目を付けたるまゝよく洗ひ、肉へたて
 よこに細かに切り目を入れ、裏むしなしたる味あ
 まき味噌を切り目へすりこみ、庖丁刀にて上面の
 みそを平らにならし、強き火にかけて二十分間ば
 かり焼き、皿に鹽を敷き、其上に焼きたる鮑を貝
 共に盛り、冷めぬうちに出すべし、箸にてちぎれ
 るくらゐ柔らかにて味もよろしきものなり、

松魚釣り

かはぐち

目に青葉、山ほととぎす、初かつを、葉堂
 日本内地に恰度青葉の五六月の交、暖潮がだん
 く北をさして南海岸を洗ふやうになつてくる
 と、きつと松魚が群をなして押寄せて来る。海の
 魚族は随分澤山で逆も人間では未だ数へきれない
 ほどさまざまである。その中で一番サツパリと男
 らしいのが此かつをである。尤も鯉にも父もあり
 母もあり兄弟もあり姉妹もあるが、それ等は何れ
 も根性とは如何にもシャンとして居るから、人なら
 侍根性ともいひ得べきもの、やうである。
 松魚の性行及び漁師がそれを漁獲する法なとに
 就いては、知れる人は割合に少い。讀者の中にも
 書物などで承知した人はあるであらうが、實地に
 観察した人は恐らく一人もないかも知れぬ。何故
 なれば、鯉釣りの船には素人乗せて行かぬのが
 古から彼等漁師仲間の不文の内規であつて、中
 を嚴格にそれが實行せられて居るから、大膽な斷

言のやうだが、讀者の中には未來は兎に角今日ま
 では實地に見た人はないといひ得る。
 實は、漁師仲間には右に述べたやうな内規がある
 ことを聞いて、之を破らしめて此實驗談の材料を
 得ることに随分苦心をした。誰に頼まれたので
 もない全く自分で實見してみたくて、生來下りに
 くい頭を幾度か彼の赤銅製の仁王のやうな漁師の
 前に下げて、懇に頼んだところ、果して吾輩の思
 ふ坪に當つて成功した。といふのは、吾輩の劈頭
 から頼んだのが漁師共の内心の何處かにふれたと
 見えて、いいらは板は一枚、下地獄、大臣様もな
 ければ大金持もない、何時もオカシな奴等が來や
 がつて、いいらに威張つたり金を出したりして『乗
 て行け』といひよるから、胸くそがわるくつて何
 時も『ならね』つて斷つてやるのだが、お前さ
 んのやうな本氣で観たい人なら、いいらも見て
 もらいたいよ。といひ出したから、吾輩はシメた
 と内心に面白く思つたが左あらぬ體に、邪魔では
 あらうが、さうしてもらへれば誠に幸だ、と挨拶
 をして到頭便乗して、實際目撃したそのありのま

ゝのところは下の如くであつた。
 眞鯨ならば近海でも漁れるが、吾輩の便乗した
 のがスヂ鯨といふ大きい奴と漁る船であつたか
 ら、遠く乗り出した、船は十人の専門家と吾輩一
 人で総員十一人。濱を出る時は二人で漕いで居つ
 たが、松の並木が唯緑の棒を横へたやうに、濱の
 真砂を行きかふ人の豆のやう釘のやうになつて行
 くにつれて、廣つひろとした沖に出て、それから
 は誠にゆるやかに漕ぐやうになつた。後に三艘ば
 かりついで居る。最初から緩く漕ぎ沖へ出てか
 ら一層そろそろ漕ぐのは、之は多分鯨を驚かさぬ
 爲の用心と思つたのは矢張素人考であつた、實は
 船の艫の方に少し隔て、直徑五尺あまりの夏密
 柑を俯向けにしたやうな籠、俗にいふ生け簀を太
 い綱で曳いて居ることがわかつた。その生簀の中
 には生きた鯛が潑刺として居る。それが即ち鯨を
 釣る爲に用意した餌である。聞けば他の魚は大抵
 な餌でも懸かるが鯨は生きた餌でなくては懸らな
 いとのこと、其威張加減が獅子のそれと全く一致
 して居るから面白い。

大陽が海の上にキラ／＼して居る。時計を見る
 と午後一時過ぎであつた。漁師共サア之から釣ら
 うと用意にかゝつた。ドウやら鯨の進行の道筋に
 出遇つたらしい。併し時計を眺めながら吾輩は漁
 師の頭を對つて、川の魚は早朝から十時まではよ
 く餌にかゝり、その後はだん／＼つかなかつて
 正午から午後二時過ぎまでは殆んど全くかゝらな
 い、その後夕方になるまでは又よく餌にかゝるの
 が普通であるが、海の魚は日中而かも此午後一時
 過ぎに懸かるであらうか、と尋ねてみると、鯨は
 日中でなければ旨くかゝらない、彼奴は夜やたそ
 がれなどの曖昧な時に餌を漁らぬ性質だといふ返
 事であつた。曖昧な時に間違つて針らるゝのより
 は白晝に堂々釣り上げらるゝのが、人間から見れ
 ば可愛ゆくて男らしいと賛成したくなる。殊に非
 常な彼等の群集になると押しつ押しされつ行進する
 ものだから、澤山の中には隣のものから押し上げ
 られて背が海表面から外に曝らされて乾燥して
 しまつて下半分は元氣な鯨で上半分は乾物の鯨甚
 しきは鯨節となつたまゝで、エッサ、ヤッサと押

して来る。さういふ場合には、鯛の餌も要らない、鯨の鬚で製した偽の餌でもバク／＼と懸るさうである。が吾輩の見て居つた此時はさうひどくはなかつた。

生簀を舳に引寄せて、手綱で掬つてバラ／＼と散く。之は鯉をよせる爲のマキ餌である。マキ餌がすむと、愈釣り始めた、竿といつたとして桿の字を用ひた方が適當で、長さ三間許、或三郎の持つたやうに未の撓むよ様なことのない唯の棒のやうな竹で、糸の端に釣をつけ、それに生きた鯛をつけた丈で、浮キもつけねば重りもつけて居ないが、見る／＼うちに喰つ付いて来る。手むたへがあると、漁師が一種得意の調子をとつて颯と竿を上げて真直ぐに立てると、喰付いた鯉が丁度漁師の脇のところへゆれてくるやうに糸の加減がよくついて居る。脇へ来ると些と上膊で押ゆると、釣と鯉がサツと離れて同時に上膊の押へがゆるんで、鯉が舟の中でバチ／＼躍つて居る。漁師は一向平氣で第二の餌を釣につけ替へて又投げ入る。之を素人が眩ふ位も早くくりかへして、釣る

とも／＼、見る／＼うちに船底が鯉の積かと思はるゝまでに釣り上ぐる。上手な漁師になると脇に抱えるほどにも至らぬ。サツと上げたと見る間に、ドウかの手加減で、懸つた鯉がバラツと離れて船底に程よく踊り込む。釣針は丁度其漁師の膝の上に来る。早速餌をつけて又投込むといふやうな頗る敏捷なものである。

唯一の尾でも懸つた鯉を一旦落して海へ歸らしたならば、それこそ最後、丸で半匹も喰付かなくなる。況して慌てゝ人でも轉がり落ちやうものなら、それ限りである。ウツカリ手足を一寸浸たす丈でも早や全く喰つ付かなくなる。こんなところは鯉は除程過敏である。元來鯉釣は舟の片方の舳には往々過つて釣手が舳からこぼれることはある。之が鯉をつるには非常に禁物なる故、素人を鯉釣船に乗せぬといふのであるとのこと。成程ものには道理のあることよと思ひ當つたことであつた。聞けば、鯉釣は確に一種の技術であつて、懸つた鯉を落すといふことは、漁師にとりては恰も

國七淑女が節操を云々さるゝと同様以上に不名譽として感ぜられて居る。又其一尾の失敗で四五艘の仲間が全く収入をし損ずることだから尤なことである。夫故に彼等漁師は出漁前にも常に釣方を稽古して、能く其要領を得た者でなくば同じ漁師仲間でも乗せて行かぬといふことである。

鯉の群が方向を轉換して釣るに都合がよくなくなりさうになつたら、又候散き餌を用つて彼等を寄せながら、僅二時間あまりで、頭が『まう時が来た』といふ。見れば船内ピン／＼したる鯉の山をなして居る。まゝ二千あまりだらう、とぼんやりした呑氣な計算であつた。確に三千近くが僅二時間十八で釣り上げたのであつた。歸りは當番の屈強な壯漢ばかりの四挺櫓で曳／＼の掛聲に、船は嫩草山を掠めて過ぐる春風のやうに、フワリ

／＼スラリ／＼と滑つて進む。中老の非番の漁師共、跳ぬる鯉の山の傍で舷に凭れて、陸の方の上から突き立つたやうな真白な雲の峰の澄み渡つた碧空に際立つて白く時てるをながめながら、『もう夏になつて来たのー』といつて居つた。濱

三十六
には出迎の女子兒などが右往左往に騒いで居る。併しまだ其聲は船までは聞えない。

雑 録

●講習會に就て 前號に豫告せる本會夏期講習會は初め三週間の豫定なりしが講師の都合にて二週間に短縮し其代りに一日の講習時間を増加して略豫定の計畫を遂行することとせり。講習員諸君は其御積りにて精々御勉強あらんことを望む。

- 地方より上京の方にて滞在其他一切の費用何程を要するかに就きて御問ひ合せの方より定めし他にも同様の御求めあらんかと存じ記者の計算せし處に因れば左の如き結果となれり
 - 一金四圓五十錢也
 - 一金壹圓五十錢也
 - 一金貳圓也
 - 一金壹圓五十拾錢也
 - 計金九圓廿五錢
- 七月廿日即ち講習前日の晝食より八月四日即ち講習終了日の翌日朝食迄十五日間食料 寢具 損料 講習料 小遣錢、一日十錢の割、

即ち拾圓の費用あらば上京講習の益を得可し。尤も右の食料等は本會にて紹介せる寄宿舎の義侠的實費を計算せるものにて旅館業者の側より尋ねたるものにあらざれば旅館宿泊者は是れ以外種々なる見積りを要す可し。

●玩具の懸賞募集 三越呉服店にては先頃左の如き玩具の懸賞募集をなし本會主幹中村教授は審査委員を囑托せられたり

▲規定▼

一、懸賞懸賞玩具は最新にして創意のものに限り、尙武、海事、文藝、家政等の偶意あるも亦妙なりと雖も、單に飾物なる玩具よりは實用的遊戯品を歓迎す。

一、懸賞玩具は左の三種類たるべし

- 男女兩用三歳以下に適するもの
男子五歳以上十歳以下に適するもの
女子用五歳以上十歳以下に適するもの

一、懸賞玩具は戶外用とするも室内向にするも隨意なれども可成兒童をして飽しめず且つ破壊し易からざるものにて季節には關係無きものたるべし玩具内に機械等を應用するも妨げなし。

一、懸賞玩具は其材料色彩等に危険の虞あるものと賭博類似のものとは避くべし。

一、大サは曲尺三尺以内(縦横とも)を限る。

一、懸賞者は其新案を圖畫にて示し詳細なる説明を附せらるるか或は實物に調製し、密封の上東京日本橋駿河町三越呉服店懸賞玩具係宛とし住所姓名を明記して送らるべし。

一、締切期限は五月二十五日とす。
一、懸賞の圖畫若しくは製作品は精確なる審査を經たる上左記の賞金を贈呈す。

- 一等 壹人
二等 貳人
三等 參人
四等 伍人
五等 貳拾人

又別に優秀なるものと認められたる場合には特賞を出す事あるべし。

右審査の結果一等に相當するものは、坪井博士の「燕返し」と稱する玩具なりし由なれど氏は審査委員の一人なりしたため之を番外優等とし其賞金は以下の優等者に分配することとなりし由

●三越呉服店の小兒會 三越呉服店にては前項の懸賞玩具披露を兼ねて去る五月卅日午後一時より小兒會なる催ふしをなせり。場所は舊館陳列

場の二階廣間にて最初に坪井博士の玩具「燕返し」の説明あり夫れより狂言、手品、舞踊、及巖谷小波氏のお伽噺、あり、終には例のお伽俱樂部のお伽芝居ありて午後五時半閉會頗る盛會なりしと云ふ。

●静岡縣保育會 静岡縣にては今回保育會を組織し去月一日其第一回總會を静岡幼稚園に開きた

る由、當日は會長有坂氏を初め視學學務課長師範學校長等出席、實地保育の參觀、保育事項の協議等を行へる由、左に記せるは當日の協議事項なりと云ふ。

- 一、天長節の唱歌について
- 一、地久節には幼稚園は祝賀式を行ふ可きか
- 一、談話材料の選擇について
- 一、幼児の年齢によりて如何なる程度迄自治の習慣を養ふ可きや

其他泣く子の宥め方、痴鈍なるもの、剛情なるもの、發音正しからざるものに就いての取扱法等について協議せる由、幼児教育界のため此種の會合の益健全ならんことを望む。

▲二百餘戸の薬舗を欺く 此程巴里の薬種商二百餘名は悉く同一人の詐欺師に騙されて執れも五州以上の損失を爲し名に其詐欺の手段は薬種屋に一の処方書を持來りて其調劑を求めたるにて處方書にはアンリ博士の水薬なるものを記しあるも此水薬は執れの薬種屋にも無きものにて念のため其賣棚所を附記しあるを以て此處方を要求せられたる薬種商は執れも同所に赴き一瓶五圓の水薬を少なくとも一瓶以上を購求し來り調劑を終りて其客の來るを待ちたるに遂に來らざるより不審を起し後に漸く詐欺なることを知り非なるなり而してアンリ博士の水薬なるものは着色したる普通の水に過ぎず店は一時傳入れたるなり此詐欺師は斯くして少なくとも千圓以上を詐取したるなりと

▲可驚迅速なる工事 米國紐育マダソン街に架したる吊橋は此程其位置を變ずるの必要を生じ凡そ五百呎の下流に移轉せしむる事となりたるが總重量六百噸水面上高さ六十呎の此橋は僅々二時間内に三十人の職工を以て移轉し得る豫定なりと又其移轉工事費は七万弗なりと云ふ

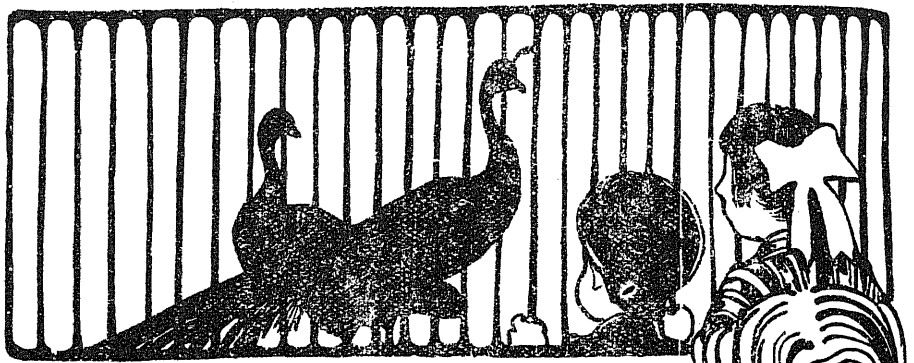
▲兩面の新聞紙 瑞西ツリーツ州のグルーニンゲンと稱する人口一千二百を有する一由にて發行するウオーヘンブラットと云ふ新聞は同時に自由黨及び社會黨の機關新聞にして一面と二面とは自り黨三面及び四面は社會黨の機關として使用し日々同一の紙上に於て論戰を爲し頗る奇觀を呈し居る由

▲濠洲の面積と人口 濠洲の面積は英本國の二十六倍なれども其人口は英國より少なし然も白人以外の移住を禁じ居るを以て米國以上の富源を有するに拘はらず其開發は頗る遅々たる程度に於て行はれ居る由なり

▲無線電信の効用は多くあれど近頃最も有用なるは寒中氷塊の多きを船全志に警告する事なり例へば獨逸のカイセルウイエルヘルム號大西洋中に航海せし時に百浬も離れたる處にあるチエートニツク號よりの無線電信によりて或る場所る由の報知に接したりといふ

▲人命救助の脈 或る處にて凍船の難破せしものありしに船長の機轉にて積荷なりし脈を網にて擲り海に投げ入れたるに其脈は間もなく海岸に泳ぎつきたれば陸上との交通を得て一人も残らず救はれたり

▲大洋の水量 或る地理學者の説に地上の海の水全く汲み干され後地上の凡ての河水を其跡に注ぎて目下の高さに水を入るゝには大凡四万年を要すと



粉屋の鼠

音吉

おきな

むかし、ある田舎の村はづれに一軒の粉屋がありました。前
 は見渡す限り青い麥畑で、裏には絶え間なく回る水車の音がや
 やしく聞えて居りました。

さて此粉屋の水車小屋には例の鼠殿が何十匹となく澤山住まつて
 居て夜になると天井や壁の間から出て来ては麥やか米の御馳走に
 なつて居りました。處が此の鼠の中に一匹の子鼠がありました。
 此子鼠は大層な怠けものでして不性者でありました。何をす
 るにもかつかうがつて中々容易には動きません。或晩のこと、外の
 鼠達は例の通り麥やか米の採集に出掛け様として
 甲「お前も行かないか」と云ひましたが不性者は何とも云はず、
 黙つて考へ込んで居りました。スルト外の鼠達はもどかしがつて
 乙「オイ、不性者何うするんだよ、早くきめないと僕等は行つて
 仕舞うよ」

と云ひましたが、不性者はそれでも一向平氣でそして然も懶氣に

「僕は行つても行かないでもないや」と云つて居りましたので外のものは「勝手にしろ」と云ひながら皆行つてしまひました。

頓て一二時間もしたと思ふ頃大勢の鼠はドヤ／＼と返つて來ました。見ると誰れも／＼何か心配事があるらしい顔付をして居ました。そして皆天井の一隅に集つた所で一番老寄の大鼠は梁の上から一同を見渡して

大鼠「コレ／＼皆の者、吾々が此粉小屋に住まうのもモ一おしまいにせねばならぬ様だ。今の處では残つて居る麥や米はまだ大分あるが何しろ粉屋が引き越して仕舞つたのだから、ソ／＼長くは居られまい。夫れに小屋も大分古くなつて柱は曲つて來たしするから何時何時危険ないことがないとも限らぬ。就いては急ぐ譯でもないが是れから何處へ引き越したのか考へねばなるまい。夫れとも何時迄も此處に居るとしよ

うかしら、皆は何う考へるかね」と云ひました。スルト外の鼠達は口を揃へて

皆それはもう、云ふ迄もなく何れ引き越すことにして皆で唯其行先を考へ様ではありませんか」と云ひましたが唯一人例の不性者は何とも云はず黙つて茫然して居ましたので老鼠は聲かけて

老鼠「何うだ、不性者、前は何方がいと思ふか」と聞きましたが不性者は然も面道臭いと云ふ様な顔付で

「僕には何方がいゝか判らないや」と云つて居りました。

兎に角是で此小屋にも長くは居れないと云ふので外の鼠達は何れも寄り／＼引き越の相談をして居りました。

スルト或日の事、大層な大暴風雨で裏の小川は水が溢れて古い水車小屋は泥水で一坏になりそして風の吹く度に唯さへ曲がつた柱は今にも折れるかと思ふ様になりました。そして時々、ミン、ピンリ、などゝ大きな音がして何とも云へぬ凄いの有様でした。ソコデ大勢の鼠達はまたも天井の大廣間

で會議を致しました。例の老寄の鼠は梁の上から外の暴風にまけぬ大きな聲を出して

「何うだへ、皆の衆、愈此小屋も今日限りだね、

ぐづぐづして居たら何んな目に遇ふか判らない

今の中に逃げ出すにしようではないか、そう云ふ中にも潰れるかも知れん」と云ふと外へ鼠

達も皆大賛成で、

「行う、直に行う、行く先きは隊長の考にかさう、隊長！何處へでもい、から連れて行つて下さい」

と云ひますので老寄の鼠は決心して

「夫れでは愈出掛け様か」と云ひ掛けました、時にまだ何とも云はない鼠が一匹居るのに氣が付きました。ソノデ老寄鼠は

「オイ、例の不性者！お前はまた黙つて居るじやないか、今は黙つて居る時ではないぞ早く何

とか極めないか」と云ひましたが不性者は矢張り不性者で例の通り然もうるさいと云ふ顔付で

「僕にや判らないや」と云ひました。是には流石の老鼠も腹を立て、「宜しい勝手にするがい、

か前の様なものはもう誰も構つて遣りはしない、其代り死んだつて恨むことは出来ないぞ」と云ひました、不性者は一向平氣で

「死ぬか死なないか判りやしない」と云ひましたので外の鼠達も呆されてしまいました。

老寄鼠は仕方がないので

「ソレデハ行かう！、右へ……準備へ、番號！」

と號令をかけて勢揃をして、頓がて「右向け右、前へ進め」と云ふと一列に並んだ大勢の鼠は足踏そろへて、チュツ、チュツ、チュツ、チュツ

々々々々、チュツ、チュツ、チュツ、チュツ、チュツと鼠の喇叭を吹きながら暴風雨の中を何處へか行つてしまひました。

不性鼠も小屋の入口迄出て来て大勢の後見送つて居ましたが別段一所に行かうとも思はないと見えて今しも最後の小鼠の姿が道の曲がり角から消え

ると共にノツンリと身を起して破はれた水車の傍に來てドゥ〜と凄い音をして落ち行く水を眺めながら

「ア、く、是から此水車小屋は僕一人のものだ、ナアニ皆の居ない方が氣樂でい、や御馳走も一人で食べて居れば何時迄もあるは」

と云つて居ました。スルト天井の方でビシリ、とえらい、けた、ましい音がしましたので今迄平氣で居た不性鼠も我知らず首を縮めました。暫くすると又今度は前よりも一層大きなビシリと云ふ音がしたかと思ふと、ドシン、メリ、リイツと云ふ音がして小屋の向ふの隅の天井が一本の梁と一所に落ちて來ました。是には流石のんきな不性鼠も驚いたと見えて我知らず戸口の方に駢け出して今しも土間へ飛び下りて敷居を飛び越え様とした時に

ゴーツと云ふ一吹強い風が來たと思ふと、ビシリ、バリ、バリ、ドシン、と云ふ大きな音がして此水車小屋は全くつぶれてしまいました

翌日の朝、暴風雨が止んで川の水も平時に返つた頃村の人達は破れた水車小屋を片付けに來てだん、柱や丸太を退けて行くと、頓がて入口の敷居

と梁との間でおせんべいの様に潰れた一匹の鼠を見付けました。そして人達は

「鼠は剛好なもので家の到れそうになつた時などには能く前から逃げてしまふものなのに此鼠は何うしたのだらう」と不思議に思ひながら隣の家の三色猫に遣つてしまひましたとさ。

何んでも博士

お う な

とある田舎に一人の薪賣りの老人がりました。此老人の家から程遠からぬ部に一人の博士がりましたが、老人は時々薪を以て行つては色々の事を此博士から教つて來ました。そして博士と云ふものは誠にえらいものだと感じて居ましたが、唯一つ腑に落ちぬことのあるのは彼の博士は時々博士それは私にも判らない。何々博士の處へ行つて聞いて御覽ん！」と云ふことです。

博士はえらい人であるのに何故なんでも判らないのだらうと不思議に思つて居りました。或日例の通り薪を持つて博士の家に來ました、そ

して例の通り色々の事を博士に尋ねて居りました

老人時に、先生！、私は何うかして何んでも能く判る博士になりたいと思ひますが何うしたら何んでも判らないことのない博士になれませうか」と尋ねました博士は吹き出しながら博士「それはお前！、何んでもないことだ。先づお前は毎朝早く起きて顔と頭を洗ふかね」老人「へエー、時々洗ひますが時々は洗ひません」

博士「そんなことではいけない。えらい人になるには先づ毎朝よく顔と頭を洗はなければいけない。それから洋服と靴と帽子とを買つて来て着なければいけない」と云ひますので老人は早速洋服やら高帽子やら靴まで買つて来てそして毎日能く顔を洗い頭を洗ひて居ました。鏡で見るとコレハマア大變な立派なもので前の薪屋さんのおぢいさんとは逆も比べものにはなりません。老人大悦びで何んだか前より大變恰好になつた積りで遇ふ人毎に「私は今度何でも博士と云ふ博士になりました」

と吹聴して居りました、之を聞いた村の人達は「可哀相に薪屋の爺さんは氣が狂つたよ」と云つて居ましたがおぢいさんは氣狂處ではなく本氣に博士になつた積りでした。

處が或晩のこと村の金持の家に泥棒が入つてお米を五俵持つて行つてしまいましたが何うしてもわかりません。スルト一人の若者が

若者「判らなければ何んでも博士に聞かす」と云ひましたので、夫れよからうと早速使を遣つてお爺さんを呼寄せました。

お爺さんは例の洋服に靴を穿いて然もえらさうにやつて來ました。金持は早速お爺さんを客間に通して色々の話をしながら泥棒は何處に居るだらうかと聞きました。スルトお爺さんは一寸首をかしげて考へて居りましたが

「ナニ直にわかるだらう、少し御馳走でも食べて居る中には判るに違ひない」と云ひますので早速御馳走を運ばせました。先づ最初に出たのがまぐろのおさしみ、お爺さんは之を見て

「ハ、ア、之が一番だ」と何の氣なしに云ひまし

たが此時給仕に出た男は驚いて青くなつて引き込んでしまひました、次に出たのが鯛の鹽焼、之を見たと爺さんは

「ハ、ア、之が二番だね」と云ひましたので此給仕男も驚いて戦へながら引き込んで行きました。

次に出たのが鶏のお吸ひ物、お爺さんは亦も「ハ、ア、之が三番だ」と云ひましたので此給仕男もこそくと逃げて行きました。次に出たのが栗のきんとん、お爺さんは亦も

「ハ、ア、之が四番だ」と云ひましたので給仕は又急いで出て行きました、其次に來のが豚の甘煮スルトまたお爺さんは

「ハ、ア、之で五つだね」と云ひましたので給仕はもう逆もかくせないと思つて「お爺さん恐れ入りました。私共が盗んだに違

ひありません」と云つて白狀してしまひました。是から何んでも博士の名が廣まつて薪屋のお爺さんはほんとの博士になつてしまひましたとさ。

めでたし〜〜。

猪と狐

或日狐が山を散歩して居ると向ふの方で猪が頻りに牙を研いで居りましたので狐は不思議に思つて「猪さん〜君は何をして居るのだね？」と聞きました。スルト猪はけん顔して

猪「何するつて、御覽の通りさ、別段何んでもないさ。」と云ひますから狐は猶更不審に思つて狐「夫れでもおかしいではないか獵師も來ては居

ないし、喧嘩の合手も居ないのに、そんなにあはてないでも宜いぢやないか、それより向ふの方へ行つて遊ばうよー」

と云ひました猪は一向平氣で獵師が來たり、喧嘩の合手が出て來てからは仕事は澤山あるからね」と云つて居りました。

月刊産科婦雑誌

購読希望者は日本産科婦協會員となり一ケ年分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に九年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見えんとす産科婦雑誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むべからず二段組十八行の植字は自ら内容の豊富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては竊に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ

(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尙高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむることに試験準備の諸姉に對しては無二の良師友と謂ふも強ち誇大に非ざるべしと信ず

明治四十一年六月

東京市日本橋區濱町三丁目七番地

産科婦人科楠田病院内

發行所 日本産科婦協會

(電話浪花一六〇番)

フレーベル會發行

幼稚園遊戯

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵稅四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてであります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレーベル會發行

幼児談話材料

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵稅四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なるものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。



行發會ルベール内校學範師等女子女

もど子と人婦

本領

家庭の經營は六ヶ敷いもの、理想の家庭はなかく實現し難いものでありますが、併し現在の家庭は國家の爲めに益改良し行かねばならず、如何にせば最も完全な家庭を得可きかと云ふことは社會の進歩と共に益研究し行かねばなりません。そこで家庭研究と云ふことが頗る趣味ある難問題となる次第であります。

本誌は此必要に應じて着實な理想と穩健な主張とを以て真正な家庭生活の意義を明にし世の家庭教育、女子教育に向つて、適切な科學的解決を試み様と努めて居るのであります。殊に家庭教育幼児教育に就ては他に斯界の指導となる可きものがありませんから本誌は進んで本邦に於ける幼児教育界の木鐸たらんことを私に期して居る次第であります。

育兒に眞面目なる世の父兄並に幼児教育に關係せらるゝ諸君は奮つて御講讀あらんことを願ひます。手續は表紙の第二頁に御座います御覽下さいませ。

* * * * *

